



教皇様の敵

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済
© 1993 発行所
財団法人 精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6
TEL.0797-31-3452・FAX.0797-31-3448

福音宣教の星マリア

(一九九二年九月、スペインのウエルバで開かれた国際マリア学会に寄せて、教皇様がお送りになった書簡。)

★ 今回のマリア学会が偶然にも、アメリカ大陸発見と福音宣教五百周年に重なったのは、何とも喜ばしいことです。当地ウエルバ出身の人々も、アメリカ発見と福音宣教には大いに関わっています。コロンブスを温かく迎え、その航海計画を成功に導くため並み並みならぬ援助を与えたラ・ラビダのフランシスコ会の役割を忘れることはできません。また、「神と聖マリアの御名のもとに」パロスの港から船出していった各地の勇敢な船乗りたちは、壮大な叙事詩の中心人物となって古い世界の様相を一新させ、同時にキリストのメッセージを広める上で予想も

できなかったほどの可能性を開きました。

アメリカ大陸への福音宣教をみると、まず目につくのは強烈なマリア崇敬です。実際、アメリカ大陸の人々に宣べ伝えられた福音は、「処女マリアを気高さの極みとして呈示していた」(「プエブラ」282) のです。スペイン宣教師たちの伝えたマリア信仰は間もなく各地で実を結び、「福音宣教の開始期に登場したグアタルーパーのマリア像の面影には、イスパノ・アメリカ人の歴史と文化が映し出されている」(同本) と言われるまでになりました。

五百年目の新福音宣教

★ 今年はこの比類ない成功を記念するわけですが、それが輝かしい過去への礼賛に終わる

はなりません。「教会はまさに、宣教するために存在しています。」

「福音宣教」14番

御子による宣教と聖霊降臨に始まる教会は、本質的に宣教者です。教会はそのために存在し、違わされたのです。諸国民を照らす光、正義の太陽、キリストの福音宣教のわざを時間と空間の中で永遠に続けてゆくために。これこそ教会が使徒の言葉を借りて何世紀にも渡り主張し続けてきたように、急いで全被造界に福音の便りを告げねばならない理由です。「私が福音をのべていても、それは誇りではなく、そうしなければならぬことだからである。ああ、私が福音をのべないなら、わざわざいなことだ。」(「コリント9・16」) 従って、教会はこの五百年記念祭の中に「新しい福音宣教を促すよびかけ」(サント・ドミンゴでのお話、1984.11.10) を見出します。それは「その熱意と、理論と表現において新しい福音宣教」(ラテンアメリカの司教協議会へのお話、1984.11.12.10.11) へと駆り立てるものです。

このような新しい福音宣教への呼びかけは、時の状況にのみ関わるものではありません。宣教の深い動因は、「宣教のために存在する」教会そのものに根ざしています。教会は、救いの良い知らせを預かり、それをすべての人にそれぞれの言葉で(使徒行録2・11参照) 伝える役目を負っています。その誕生から地上での旅路の終りまで、教会は常に福音宣教の中に自らの存在理由を見出します。しかし、私たちの前に開かれた歴史の新しい一ページは、教会の福音宣教に新たな努力を要求しています。キリストのメッセージの前に、現代世界がつきつける問いかけに、応えなければならぬのです。

スペイン人宣教師の使徒的活動

によって拓かれてきたラテン・アメリカの現状を見るとき、私たちは新たな福音宣教によって、この地のカトリックの基盤をよみがえらせなければならぬことを悟ります。「最初の宣教者たちの業績を受け継ぎ、完成させなければなりません。」(サント・ドミンゴでのお話、1984.10.12.11.1) ラテン・アメリカでも、世界の他の多くの地域と同様、「いろいろな信心の伝統やキリスト教の民間信仰的なものがまだ生き生きと守られています。しかしこの倫理的・霊的遺産もまた、多くの影響、特に世俗化と新興宗教の流布に押されて、消滅する恐れがあります。ただ新たな福音化だけが、はつきりとした深い信仰の成長を確かな

ものとし、これらの伝統が真の自由を支える力となるよう貢献できるのです。」(「信徒の召命と使命」34番) 新たな福音化をすぐにも一できればさらに強力に必要としているのは、いわゆる第一世界です。「かつて宗教とキリスト教的生活が盛んで、生き生きとした活発な信仰共同体を生み出すことのできたすべての国や国民は、現在、広がる一方の宗教的無関心、世俗主義、無神論によって厳しい試験を受け、時として根本的に変えられてさえます。」(同上) ですから、新たな福音宣教の場は全世界に広がります。「世界中で、社会の中のキリスト教的組織を繕うことが急務であるのは、確かなことです。」(同上)

第二バチカン公会議と聖母

アメリカ大陸の福音宣教を導いてきたマリアは、同時に、二十一世紀に入る教会が急務とする新たな福音宣教の、導きの星でもあります。あらゆる福音宣教は、聖霊降臨に始まる信仰の歩みに従って進むからです。「この歩みの列の先頭はマリアでした。私たちは、彼女が、高間にいた使徒たちの真ん中で聖霊の賜が与えられるように求めて祈っていたことを知っています。」(「救い主の母」26番、「教会憲章」63番参照)

★ 第十一回国際マリア学会を前に、皆さんは「第二バチカン公会議以降のマリアに関する教え・聖母信心と崇敬」について

1 教皇様の声

研究を重ねてこられました。「教会憲章」の第八章は、公会議において教会の教導職がキリストの御母に捧げた、最も完全に体系的な文書です。教皇共同体がこれを「受け入れた」ことで、聖なる処女についての教えはより深く、豊かなものとなりました。それは、公会議以後の神学上の刷新で、最も大きな成果です。「教会憲章」以外にも、思い起すべき文書はいくつかあります。パウロ六世の信仰宣言、使徒的勧告シニウム・マニウム(偉大なしるし)、そして「聖母崇敬についての勧告」も、神学上・司牧上価値あるものです。回勅「救い主の母」で、私も聖母を称えたいと思いました。教皇職の開始に当り、Tonus mus(すべてあなたのもの)を座右銘に、私自身を聖母に奉献したいと願ったのです。

世界中から集まった、卓越した

実にマリヤは最初に福音を受けた方(ルカ1:26-38)であり、最初の福音宣教師(ルカ1:39-45参照)でもあります。すべての時代の人々に向かって、カナのメツセージを告げておられます。「何でもあの人の言うとおりにしなさい。」(ヨハネ2:5) マリアに秘められた福音宣教師の力は教会史上つねに確かめられてきました。マリヤ自身が福音を生き、成就したという事実によ来しています。それも、「マリヤがいなければ福音は血と肉を奪われ、単なるイデオロギーか宗教の合理化と成り果てただろう」(「ブレブラ」30)と言えらるほどに。ですから、新たな福音宣教師のプログラムは、かつてのアメリカ大陸でのように、キリストのメツセージの最も崇高な体現者・従う人々を奮い立たせる模範としてマリヤを仰ぎ見つつ、果してゆくべきです。



★ 第十八回国際マリヤ学学会は、現代のキリスト信者たちにとつて意義ある模範として、また

彼らが担うべき福音宣教師の促進者としてマリヤの姿を示そうと試みています。神の御言葉を信仰をもって受け入れ、生涯を決定的に御子と結び付けたマリヤは、「キリストの最初の、そして最も完全な弟子」(「聖母崇敬についての勧告」35番)であり、贖い主のすぐれた協力者でもありました。私の前任者パウロ六世によれば、マリヤは「試験をただ無気力に忍んだり、偏狭な宗教心に縛られて他者を毛

嫌いするような女性ではありませんでした。それどころか、マリヤは、神がいやしめられた人々を高め、権力者とその座から引き下ろすお方であると、公然と言つてのけるような女性でした。(ルカ1:51-53参照)：貧困と悲しみ、亡命と故郷を離れての生活を体験した強い女性であり(マテオ2:13-23参照)：神である自分の息子だけにかまけていた母親ではなく、その業をもってキリストに対する使徒共同体の信仰を芽生えさせたほどの女性です。(ヨハネ2:1-12参照) その母としての任務は、カルワリオの丘において普遍的なものとなつて、全ての人に拡張されたのでした。」「(「聖母崇

敬についての勧告」37番) 現代の信者たちの模範 今日のような状況の中で、容赦ない世俗化の波がキリスト者の信仰を圧殺し、個人の領域に信仰を押し込めようとしているとき、マリヤの姿は今日の信者たちの模範、勇気づける者として現れます。マリヤは信者たちに、今すぐ福音を受け入れ、多種多様な現代のこの世界の状況、職業、社会、経済、文化、政治の分野で具体的かつ現実の行動として表さねばならないことを教えます。(「信徒の召命と使命」2番参照)

★ 当り、皆さんはアンダルシア(…)この学会を終えるにアのマリア信仰の中心地、ロシオの聖母聖堂に集まつておられます。毎年、聖霊降臨の時期には無数の巡礼たちがここを訪れます。今回は私の代りに教皇特使としてソマ口枢機卿がおいでになります。スペイン全土からの多くの同僚たちと一致して、「白いハト」聖母のもとにひざまずき、スペインの愛すべき子供たち、特に病人、高齢者、疎外された人、苦しむ人々のために、母としての取りなしをお願いします。 大いなる愛をもって、教皇の祝福を送ります。御父と御子と聖霊の御名によつて。アーメン。 一九九二年九月八日、バチカンにて。

祈り

呼吸と同じくらい大切

▽ 「主よ、私たちにも祈りを教えてください。」(ルカ11:1) オリーブ山のおもていでエズスに向かつてこう言った時、弟子たちはありふれた頼みごとをしたのではありませんでした。自然な信頼感をもって、人間の心の奥底の深い要求を表したのです。 実のところ、現代世界はこうした要求にはあまり耳を貸しません。 日々の生活の慌ただしさは、どう

けてくる通信手段と相まって、祈りに必要な内的潜心にはふさわしからぬものとなつています。さらに難しい問題は、現代人がますますこの世と人生への宗教的な見方をなくしつつあることです。世俗化が進むにつれ、人々は、この世自体の力が相互に働き合つて物事は進むのであり、神の介入など関係ない、と考えるに至つたようです。加えて科学と技術の成果も、人類は今後とも進歩を遂げ続けて

▽ 実のところ、被造物であり、それ自身不完全で貧しい人類は、おのずと全てのものの贈り主である御方へと向かい、賛美し、 何でも思いのままになるのだという確信を助長させています。 キリスト信者の間でも、祈りを「実用本位」に考える風潮が広がっており、祈りの超越的性格を脅かす恐れがあります。ある人は、隣人に対して心を開くことで真に神を見出すことができる、と主張します。祈りとは、心を散らす世の煩いから注意を離し、潜心して神と語り合うことではなく、むしろ無条件に他者への愛を実行することだ、と云うのです。真の祈りとは愛の行いに他ならないというわけす。

説教・講話・書簡等の抄記

「聖なるロザリオ」(改訂新版)

ホセマリア・エスクリバー著 精道教育促進協会スタッフ訳
定価一三三六円 一三〇〇円

ロザリオはキリストと聖母マリアの一生を黙想する祈りです。ロザリオの深さを再発見したい人にお勧めします。

キリストの「昇天」

祈り、心を焼き焦がすような望みをその御方のうちに満たそうとするものです。聖アウグスチヌスは「このことをよく知っており、こう記しました。「主は私たちを自分のために造りになりました。私たちの心は、御身のうちに憩うまで、安らぎを知りません。」

(「告白録」1・1)

まさにこうした理由で、信仰者の基本的行為である祈りは、どんな宗教にも共通しているのです。人格をそなえた神を、ただぼんやりとしか信じていない場合でも、誤った説明を受けて迷っている場合でも、例外ではありません。

祈りはとりわけキリスト教において、中心的な位置を占めています。イエズスは「うますたゆまず祈れ」(ルカ18・1)と命じておられます。キリスト信者にとって、祈りは呼吸と同じく不可欠であり、一度神との甘美で親密な対話をおぼえたなら、信頼してすべてを神にゆだね、神との交わりを求めることでしょう。

さて、このテーマは個々の人にとっても、キリスト教共同体にとってもたいへん重要なことですから、日を改めてまたお話しすることに致しましょう。

(…)皆さんがたえず祈り、喜びと賛美をもって、創造主・すべての生命と幸福の源である御方に心を上げることができまうように。救い主キリストの恩寵と平和のあらんことを!

(九一・九・九)

ホセマリア・エスクリバー著 精道教育促進協会スタッフ訳
定価一三三六円 一三〇〇円

1 「あなたたちを離れて天に昇られたあのイエズスは：また来られるであろう。」(使徒行録1・11)

キリストが弟子たちと別れて御父のもとへお帰りになった時、彼らが聞いたこの言葉は、キリストご自身が受難と死の前夜に告げておられたことを裏付けるものでした。キリストが高間で言われたのは、「私は去ってまた帰ってくる。」(ヨハネ14・28) つまり出発と帰還、新たな帰還についてだったのです。ヨハネ福音書のキリストが弟子たちに別れを告げる場面では、「私は去ってまた帰ってくる」の一言に焦点がぼやけています。

2 毎年、典礼暦年が復活節を迎え、教会は復活したキリストが弟子たちと共に地上でお過しになった四十日間を追体験します。四十日間の最後の日、昇天が近づくとつれて、別れを取り巻くあらゆるものが目に入ります。今日の典礼で読まれるのは、キリストと弟子たちの最後の会話です。居合わせた人々はおのの自分の理解に従って、イストラエル王国を再興するのはいつかキリストに尋ねました。しかしキリストは、神の国、御父の王国という展望を

強調してお答えになりました。「聖霊があなたたちの上に下り、力をお与えになる。あなたたちはエルサレム、全ユダヤ、全サマリア、地の果てまで私の証人となるであろう。」(使徒1・8)

3 神の国という展望のうちで、さしあたり最も重要なのは、「聖霊があなたたちに下る」ということです。間もなく使徒たちはこの約束の実現を体験します。聖霊降臨の日以来、まず弟子たちが、やがて全教会が世代から世代へと、贖い主の約束の実現を見ることになりました。それは今も続いていきます。弁護者である聖霊が下るとき、キリストご自身もおいでになることを教会は知っています。キリストは世の終わりまで、常に共にいてくださる(マテオ28・20)からです。

聖霊の力でキリストの証人となる人間の歴史に神の国をもたらし、高みから下る神の力が必要で、人間の力だけでは足りません。知性も意志も、その他どんな人間の能力でも不十分なのです。ただ真理の霊の力によってのみ、私たちはキリストの証人となることができます。真理の霊の力によつてのみ、教会とすることができ

てのみ、教会とすることができ

のです。(…)

4 特に復活節の間、典礼は、高間に集う使徒たちとマリアのようにたゆまず祈れと勧められています。使徒行録を見れば、オリブ山から帰った弟子たちが心を一つにして、聖霊降臨までの何日かを祈りのうちに過したことがわかります。婦人たち、主の「兄弟」たち、イエズスの御母も祈りに加わっていました。マリアは教会の誕生に立ち会ったわけですから、かつてイエズスは「私の母、私の兄弟とは、神のみことばを聞いてそれを行く人である」(ルカ8・21)と仰せになり、御母に言及されましたが、その母は、ベトレヘムでイエズスに人間の命を与えた方であると同時に、兄弟姉妹たちと共に祈り続け、教会をもたらし、世に示した方でした。

5 教会と全キリスト者の模範 皆さんは、祈る主の御母の気品に満ちた姿を思い浮かべ、御母と一致したいという熱望を抱いておられます。皆さんの心を満たすこの霊的愛情は、救いの計画の中でマリアが果たす役割を皆さんが知り、心からの信仰を持っておられることに由来します。マリアを個人の、また共同体として歩むキリスト信者の模範として仰いでおられる。

マリアは注意深く神の御言葉を聞き、心におさめ思いめぐらせていました。ご存じの通り、まことの信仰が生れ育つのは、神の言葉に聴き入る時です。マリアに起つた出来事はどれも「不可解さ」を伴っていましたが、たとえ理解できないことがあってもマリアは常に信じました。マリアは「信仰の従順」を全うした最初の人であり、これこそご自身を啓示される神の前に出た時、人間のとるべき態度です。こうしてマリアは教会と全キリスト信者の模範となりました。

この信仰、たえず探し求め、神の言葉を受け入れて思いめぐらせることによつて礼拝の行為と秘跡それ自体が意味と価値を得ます。信仰が神の言葉によつて養われず、信じていることと日々の行いの間に矛盾があるなら、信者は社会に影響を及ぼすことはできません。こうして文明や社会、道徳をむしろ悪化傾向に歯止めをかける勇氣を失い、敗北感と失望にとらわ



不変の教え

れてしまいます。若者たちは無関心になり、宗教からも社会や政治上の出来事からも離れ、しばしば麻薬などの偽りのパラダイスに逃げ込んでしまいます。

6 忍び寄るこうした危機に立ち向かうために、新たな福音宣教と万人のための、特に成人のための徹底的な要理教育が必要です。成人のためと言うのは、彼らから、まず最初に両親から、子供たちは真のキリスト者としての信仰と生き方を学ばねばならないからです。

実際、人間存在が誕生から始まり、子供時代、思春期、青年期を

神を見失うと 人にも社会にも 平和はない

「十戒」 1

(三月十四日、お告げの祈りの時のお話で、教皇様は人類がこの世とそのすばらしさを心底賛美するために、まず神を求めねばならないと力説された。)

「私たちの心は御身の内に憩うまで、安らぎを知りません。」(告白録1・1参照)

聖アウグスティヌスの有名な一節ですが、私たちの心のみならず、社会生活とそれが表すもの一切も同じことが言えるのではないのでしょうか。神を見失えば、一致のものが崩れるわけですから、個人

を経て成年に達するように、超自然の生命も洗礼に始まり、堅信で完成して超自然的に成熟した行動をとれるようになります。そして聖体にあずかることによって(そのためには必要なら救いの秘跡による清めを受けねばなりません)完全な発展を見るのです。

これがキリスト信仰者のたどる道、聖性と忠実の道、各人の歩むべき完成への道です。

今、私は特に若い人たちのことを考えています。若い皆さんは、苦悶のもとになる数々の問題に直面したことがあるでしょう。多くの仲間たちの心に、時には無関心

のかげに隠れ、あるいは敬意を示しさえしても、神への渇きがあることもご存じでしょう。無気力で死んだような信仰に甘んじてはなりません。イエズス・キリストに對して物惜しみしてはなりません。主があなたをお呼びになっても、それは若さを奪い取るのではなく、むしろそのために戦う価値のある理想、たどり着くべきゴール、勝ち取るべき勝利を与えてくださるためなのです。

昇天の日、天使は使徒たちに言いました。「ガリラヤ人よ、なぜ天を見つめて立っているのか?」(使徒行録1・11) このとがめ

せず、私たちを我が子として扱ってくださる創造主の心からの御声と言わねばなりません。その神に對して私たちの第一の義務は、神が主であると認めることです。これこそが救いの条件です。

悲しむべき幻想が、特定の思想傾向の人たちをして、この世と人間は絶対的なものであると信じ込ませています。創造の言葉を偏見なしに解釈しようとする人なら、この世の美のみならず限界をも考慮にいれて、容易にその真理をつかむことができるでしょう。どんなにすばらしくても、この世は限りある存在であり、無限の世界を反映するにすぎません。それ自身相対的であり、絶対的なものを必要としていません。

神お一人のみが絶対者なのです。神は満ちあふれる存在そのもので

は、ぶどう畑で働く人のたとえ話に出てくる言葉とよく似ています。「どうして一日じゅう仕事もせずここに立っているのか。」(マテオ20・6) このたとえ話と同じ状況が、現実には起き立っているような招きとなつてやつて来ます。歴史上いつの時代にも全ての信者に向けて発せられた招きが今、私たちにも向けられています。「おまえたちも私のぶどう畑に行け。」(同20・7)

7 主は私たちに約束なさいます。あなたたちの所に戻ってくる。教会の祝いの季節、教会の時に、

あり、崇拜を受けるにふさわしい御方です。さて、十戒の第一戒で神がお求めになつたのは、私たちの冷静な真理認識にとどまりません。まず何よりも、私たちが自由になんぞお捧げするよう望んでおられます。「心を尽し、魂を尽し、力を尽して、神なる主を愛せよ。」(第二法6・5) 神は父のように私たちが愛し、私たちが子としての愛を返すよう望んでおられます。神の愛には愛をもつて応えるのです。他に何がありませんか? 神は愛です。(1ヨハネ4・8) 人間が罪深く感謝を欠いていても、神は常に信実な方で、憐れみに満ちておられます。

私たちが神の愛にすべてを委ねるとき、地の面はいかに変わることでしょう。言い尽くせぬ驚きと共に

私たちは目覚めて祈らなければなりません。人間としてできる限りの努力をしてこの世界を築きつつ目を天に向け、キリストの再臨を待つのです。(…)

幸いなのは「神の言葉を聞いてそれを行う人」(ルカ8・21)です。その人は神の御母と同じ信仰を持つゆえに、キリストの真の兄弟姉妹です。神の言葉を聞いてそれを行う人は、幸せ。神の言葉を聞き、自らの信者としての生活の中で実行し、日々キリストのまことの兄弟姉妹となるよう努め、御母と信仰を共有する皆さんは幸いです。アーメン。(五・二三)

聖なる処女、神の愛を映す曇りない鏡、御身においてみことばは人となり、御身において人類の希望が生を受けました。隣れみもて私たちがはかない人間性をかえりみ給え。しばしば私たちは神を忘れ、無分別にも自殺に等しい愛の不足におちいりました。敵意、戦争、無関心にはまりこみ、利己主義と死が勝利をおさめようとしています。母の憐れみもて私たちを見そなわし、手を取って導いてください。

御母よ、私たちをお助けください!

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説
なしにそのまま伝える月刊紙 毎月十日発行 定価 一部八十円
送料実費 一年予約九百円 送料六百円 二十部以上の一括購入
ら送料不要
郵便振替 神戸 3-72393